

卒業者が語る高校職業教育

— 工業高校卒業者の初期キャリアにみる学校－職業の接続／断絶 —

尾川 満 宏

(2024年10月9日受理)

Graduates Talk about Vocational Education at High School in Japan : School-Work Connection/
Disconnection in the Early Careers of Graduates of Technical High Schools

Mitsuhiro Ogawa

Abstract: This study focused on vocational education in Japanese high schools, particularly technical high schools, which continue to produce a relatively large number of graduates who go on to employment, and referred to the experiences of graduates to explore the vocational relevance of technical high school education for their early career development. The results of the survey revealed that 1) graduates find it difficult to see the relevance between the content of their studies at technical high school and their jobs, 2) students feel that their experience of student guidance is more important for their early careers than their learning guidance, and 3) for female graduates, their experience of technical education has a side to it that reproduces traditional occupational gender norms. Based on the above results, we looked at the issues in research and practice in vocational education. In particular, the importance of research that considers the paradoxes surrounding the relevance of education and work was noted. The paradox is that curricula and discourses that emphasize the connection between education and work have a tendency to invite doubts about the connection.

Key words: Vocational Education, Vocational relevance of education, Technical high school, Early Career

キーワード：職業教育，教育の職業的レリバンス，工業高校，初期キャリア

1. 研究の目的と背景

本研究は高校職業教育，とりわけ就職者を比較的多く輩出し続けている工業高校に着目し，初期キャリア形成に対する高校工業教育のレリバンス（関連性，有用性）を卒業者の経験から明らかにする。そのうえで，高校職業教育の研究や実践における課題を展望したい。

若者のキャリア問題が社会的な関心を集めた2000年代以降，教育学や教育社会学では「学校から職業への移行」に関する分析が蓄積されてきた。教育システムと労働システムの関係再編が学術的・政策的な論点となり，大正期の職業指導導入期に形成された学校と

職業との関係性，すなわち「教育内容における非連続性」と「システムにおける連続性」（石岡2011）が問い直されてきた。

教育と職業の関係は，学歴資格をめぐる議論を除くと，学校と労働市場の制度的な接続ないし連結（institutional linkage）が従来から着目され検証されてきた（Rosenbaum & Kariya, 1989）。しかし，学校から職業への移行が社会問題になるにつれ，学校は職業生活に有益なことを教えているのかという内容的な関連性が注目されるようになった。

これにかかわる有力な議論に「教育の職業的意義」回復論がある（本田2009）。いわく，高校段階で生徒個人が何らかの職業的な「専門性」を獲得し，それを

拠り所として進路形成に向かえるよう職業教育を拡充すべきである、といった趣旨の議論である。この議論の特徴は、学校での学習と卒業後の職業生活との連続性や有用性、すなわち「教育の職業的レリバンス」を前提視している点である。この種の前提と主張は、日本における「教育と職業の密接な無関係」を指摘して「無関係」の改善を企図する濱口（2013）などにも見られる。これらの議論は、職業的レリバンスが欠落してきた戦後日本の教育システムの再編に向けた道標を提案している。

しかしながら、工業教育など高校職業教育の機能や効果の検証はこれまで十分であったとはいえない。高校から職業への選抜・配分のしくみに関する検証はあるものの（たとえば、荻谷1991）、職業教育と職業生活との質的な関連性に着目した分析は蓄積が少ない。2000年代前半に長谷川らの研究グループが工業高校卒業者による高校工業教育の評価を質問紙調査から分析しているが、分析項目が専門科目で教授・学習される内容の有用性に限定されている（長谷川・佐藤2002、長谷川ほか2005）。また、片山（2016）は、生徒自身の「主観的レリバンス」の観点から高校工業教育の効果を検証しているが、高校生を対象としているため初期キャリア形成との関連は明らかになっておらず、別のところでの分析では技能形成への効果に焦点化している。同様の指摘は小杉（2011）にも当てはまる。

イギリスの社会学者B. パーンステインの枠組みを参照する片山にしたがえば、知識・技能のレリバンスは教育（学習）内容自体というより規範や価値をとまななって構築されたり、判定されたりする。では、どのような知識・技能や規範や価値が、実際の職業キャリアの形成過程においてレリバントだとみなされるのか。そして、レリバントだとみなされることがらば、学校生活のなかのどのような経験なのか。

これらの問いに迫る際、高校職業教育を専門的な知識・技能という限定的な側面からのみとらえるだけでなく、より幅広い、多様な学習経験や効果を想定する必要がある。たとえば、専門学校での職業に関する教育や学習には「職業教育的」な内容のみならず「青年期教育的」な側面もあると指摘されている（植上2011）。この指摘を高校職業教育にも敷衍し、その機能や効果を職業的な知識・技能とは異なる側面から幅広くとらえるためには、教師や生徒の視点や経験から検討する必要がある。尾川（2012）による地方の工業高校フィールドワーク研究は、教師たちの視点から指導の論理を描出し、学習指導のみならず生徒指導までもが職業的必要性から組織化され、学科分化している側面を明らかにした。しかし、教師の指導を生徒た

ちがいかに経験しているのかは明らかになっていない。加えて、そうした彼らの経験が、高校卒業後の初期キャリアとの関連でどう意味づけられるのかは、今後の高校職業教育を検討するうえで重要なはずである。

そこで、本研究では初期キャリア形成との関連から高校工業教育のレリバンスに迫るため、卒業者の経験に焦点を当てて検討する。そのうえで、調査の結果をふまえて、高校職業教育の研究や実践における課題を展望したい。

2. 調査の概要

以上の問題関心にもとづいて工業高校卒業者へのインタビュー調査を計画し、2015年にパイロット調査を、2016年4月から2018年4月にかけて本調査を行った。中国四国地方の工業高校卒業者13名（卒業後5年以内の者が12名、卒業後15年の者が1名）から協力を得た（表1）。ほとんどの調査協力者は、ある協力者を介した機縁法（スノーボールサンプリング）により調査に参加した。卒業後5年以内の12名は同一の工業高校出身者であり、筆者は以前、同校にてフィールドワークを行った経験がある（その研究成果は、尾川2012を参照）。本調査は当時のフィールドワーク調査の卒業後追跡調査として協力を依頼し、実施したものである。

インタビューでは、まず、高校時代から調査時点までの経歴を「キャリアシート」に記入してもらった。キャリアシートでは、表1に示した「高3成績」「進路満足」「専門関連」についてもへの記入・回答してもらった。「高3成績」は、高校3年時1学期時点でのクラス内成績順位を5段階（5：最上位～1：最下位）で自己評価してもらった。「進路満足」は、高校卒業後の決定進路への満足度について5段階（5：希望通り～1：不本意）で回答してもらった。「専門関連」は、在学中の学習内容と卒業後進路との関連性の有無を自己判断で回答してもらった。その後、学校生活と進路選択の経験、卒業後の仕事と生活の状況や現在の悩み、高校で経験したことで現在に役立っていると思うこと（学習内容、友人関係、教員との関係）などのトピックで自由に話してもらった。そのうち本研究では、学校経験と職業生活との関連に関する語りを主な記述と解釈の対象とした。

なお、表1と以下に登場する調査協力者はすべて仮名である。また、個人特定を防ぐため、主旨を損わない程度に発言内容を加工した部分がある。

卒業者が語る高校職業教育
— 工業高校卒業者の初期キャリアにみる学校－職業の接続／断絶 —

表 1 調査協力者の概要

	名前 (仮)	性別	出身 学科	高3 成績	進路 満足	専門 関連	卒業後1年目の状況	卒業後2年目の状況	卒業後3年目の状況	卒業後4年目の状況	卒業後5年目の状況	
1	タカシ	男	電子系	3	4	あり	製造工場(正)					
2	ヒロ	男	電気系	5	4	あり	電気工事(正)					
3	マエダ	男	電気系	5	5	あり	電力会社(正)					
4	リュウ	男	電気系	2	2	あり	電気工事(正)					
5	ヒガシ	男	電気系	3	3	なし	配管工事(正)				配管工事(非) 配管工事(正)	
6	カクタ	男	電子系	3	2	なし	通信工事(正)		通信工事(正)			
7	モトヒロ	男	電気系	4	5	なし	介護施設(正)					
8	ダイ	男	電気系	2	5	あり	電気工事(正)			(フリーター)	半導体工場(正)	
9	タカ	男	電子系	2	1	なし	土木建築(正)	タイヤ屋(正)	土木工事(正)(休職)	土木工事(正) 自動車解体(正)	(不明)	
10	ジュン	男	電子系	4	2	なし	専門学校在学		国家公務員(地方機関)			
11	ショウ	男	情報系	4.5	5	あり	4年制大学在学			留年1回目	留年2回目	
12	サキ	女	建築系	3	2	なし	ファーストフード店①(非)		ファーストフード店②(非) ※掛持ち	①退職	②退職	
13	ナミ	女	繊維系	1	4	なし	エステサロン(正)	ドラッグストア①(非)と居酒屋②(非)の掛持ち		通信講座	動物病院(非)、1か月で退職 (結婚、②退職)	出産・育児、①退職

注) インタビュー時に記入してもらった「キャリアシート」より作成。

3. 工業高校での経験に関する語り

1) 専門的な知識・技能の関連性は実感されにくい

インタビュー調査を開始してすぐに明らかになったことは、学校での学習内容と卒業後の職務の関連性が積極的に語られることはほとんどない、または非常に稀だということである。そして、その関連性は、学校在籍時にはなかなか理解されないようである。高校時代の成績がクラスの最上位層で、地元の有力な電気工事会社に就職したある卒業者は、学校での学習や資格試験対策の重要性を「その時にはわからなくて」と振り返りながら語っている。

ヒロ:うーん。まあ、でもどの先生も、なんか、後になって気づいたんですけど、まあ熱心に、けっこう、俺らが言うこと聞かんでも諦めずに教えてくれたことかなとは思いますがね。在籍中はそんなこと思わなかったんですけど。「面倒くせえな」と。「いい、いい」って思っていましたけど。

尾川:それはやっぱ、仕事をする中で、なんかこう、あ、あの時言ってくれたことが、[ヒロ:うーん。]「やっぱ本当やったんやな」みたいな。

ヒロ:いや、授業の時というよりも資格試験の勉強した時にけっこう「この資格取ったらこんなことできるよ」とかっていうような。結局、先生もなんか働いとった人がおられて。その、電気屋さん(=電気工事会社:尾川注)に、[尾川:まあ、そだね。]うん。で、実際現場出るとんで、「こういうのあるよ」と聞いたってんで。後になって「あ、このことか」、その時にはわからなくて「へえ」って聞いてよかったんですけど。出てみたら「あ、これか」って。

(ヒロ2016/08)

同じくクラスの成績最上位層で、電力会社に就職した別の卒業生も、同じような語り方をしていた。

マエダ:工業の時に、あの勉強は頑張ったんですけど、[尾川:うん。]まあ、あんま先生のこと好きじゃなくて、[尾川:あんま好きじゃなかった。ふーん。]「ほんとか?」って思ってた。「社会に出たら、こういう感じだぞ」みたいな。たぶんいろいろ言われとったと思うんですけど、[尾川:ああ。]「ほんとかなあ」とか、まあ、[尾川:高校時代とかから思っていたわけ?]理不尽だな、理不尽というか。まあ結構、工業ってヤンチャなやつもいっぱいいるから、[尾川:ああ、まあ。]怒鳴りまくったりするじゃないですか。

尾川:ああ。

マエダ:なんかあんまり、勉強は結構、頑張りましたし、勉強で分からないことは聞きましたけど、それ以外はあんまり先生と関わらなかったですね。

尾川:関わらないようにしてたの?

マエダ:「ああ、別になあ」とか。

尾川:それじゃなに、あの、「社会に出たらこうだぞー」「ほんとか?」っていうのは、例えばどういうこと?

マエダ:(中略)いや、あの、社会に出たら、あの、ま、なんだったかな…なんていうか、その、授業とかでも、社会に出た時に、「このレベルができてねえと、お前そんなの社会じゃ通用しねえぞ」とかって言われるんですけど、[尾川:うん。]いやもちろん、結構多く言われたんすよ、専門授業のときは。「ここができんとお前、仕事にならんぞ」と。

尾川:うん。

マエダ:「ほんとか?」って、「こんなもん仕事に出てくるんか?」って思っていましたね。

尾川：ふーん。そんなふうに疑いの目を高校時代から持ってたの？

マエダ：いやもう、高校時代って正直、初めて専門授業やるんで、わけわからんことばかりじゃないっすか。

尾川：うんうんうん。

マエダ：「仕事のときもこんなわけわからんもん出てくるんかな」とか思いながら、[尾川：うーん。]ま、実際わけわからんことだらけでしたけど。

(中略)

マエダ：けっこう周りから、その、先生とかじゃなくて、周りから「仕事なんてとりあえず四則演算とかできりゃどうにかなるだろう」とか、テレビとかでも言うじゃないっすか。「あんまり高校のときとかの授業が役にたってねえ」とか、[尾川：うーん。] そういうこと言うから、工業とかで、こう専門知識勉強しても、「こんなん出んだろ、絶対。こんな式なんて出てこん」とか思いながら、やってきましたし。

尾川：あ、そうなんや。で、それが実際に就職してみると、[マエダ：出てきたりとかしましたよね。] 出てきたりした？

マエダ：「おお、マジか」とか思いながら、あとはもう、見たことないような・・・もう、あんまり信用してなかったですね、先生たちの言うこと。

(マエダ2017/03)

このように、成績最上位層の卒業者にとっても、高校での専門的な授業や実習、資格取得は、自らの将来の仕事とどのように、どの程度つながるのか、まったく実感できていなかったという。むしろ、「仕事のときもこんなわけわからんもん出てくるんかな」「こんなん出んだろ、絶対。こんな式なんて出てこん」と、職業との接続という観点から授業内容に疑いの目を向けていたというのである。

クラスの成績下位層だった卒業者にとっても、高校の教科書の内容と現在の仕事内容の関連性を見いだすことは難しいという。ある調査協力者は、卒業3年目の時点で学校の記憶は「薄れる一方」といいながら、職務や作業に学校での学習経験が活かされたり想起されたりすることは「あんまりないっすね」と語った。

尾川：学校でその専門的な内容をね、勉強しとるわけじゃん、したわけじゃん。それが今の仕事にこう、直接活かされたのかどうかというか、そういう実感があるのかどうかというか。

ダイ：いや、ちょっとそれは…。活かされたって言

われてももうここまでくると薄れる一方なんで。活かされた事って言われたらやっぱり。

尾川：「ああ、これ学校でやった、やった」みたいなこととか。

ダイ：まあ、実習でやる、例えば「やりました」ってなっても、それは「やりました」ってなっても、結局全然レベルが違うんで、[尾川：うーん。] やっぱり（実際の職場では＝尾川注）「おい、何しよんや」、みたいな。「そういうんじゃねーよ」みたいな。「こうやってやるんだわ」みたいな感じになるんで、[尾川：うーん。]「あれ？ちょっと学校で習った事とちげーな」と思ったりすることは2回くらいありましたけど。

(ダイ2015/08)

2) 生徒指導の職業的レリバンズ

インタビューを続けるうちに筆者は、学習指導の場面よりもむしろ生徒指導の場面における教師とのかかわりのほうが、職業生活に有用な経験として語られやすいことに気がついた。次のドキュメント資料は同じ学科の卒業者ら(同級生)によるグループインタビューで話題となった、生徒指導の経験と現在の職業生活との関連に関する語りである。この語りの前半では、電力計算の知識に関する事柄が話題になっている。たしかに学習内容は現在の仕事と関連があった、ということを経験者は事後的に認めつつも、工業高校の教師の指導が職業生活にどう活かしているかについては「あいさつとか身だしなみ」が話題になっていった。

ダイ：まあ実際、勉強してきました。電気科でいったら、電力、1、2。電気、あとなんとか。ってあったけど、実際働いてみて、理屈？計算とか。実際作業する中でとか、ないわけですよ。

ヒガシ：ないないない。

尾川：ないの？

ヒガシ：電気関係ないんで。

ダイ：じゃこのエアコン1時間つけたいくらかかる？とか、[ヒガシ：分からん。分からん。]でしょ？そういうのは計算で、あのときに学んだるわけよ。なんか消費電力という、ジュールとかワット!!とかいう、[リュウ：あー!!] 学んだるんだけどー、違うんよ。

ヒロ：すげーちゃんとしたこと言うじゃん(笑)。

ダイ：理屈は学んだるんだけど、みんな覚えてないだけで。違うんよ、勉強、よりもさあ、先生、じゃない？

ヒガシ：あーあー。

ダイ：考えてみ？だってさあ、いろんな先生おったじゃん。〇〇とか、[ヒガシ：ああ、おったね。] ね。◇◇先生とかね。科長とかね。▲▲親方とかね、おったじゃん。って考えたらさ、あの人たちは結構まともなこと言っとったと思うよ。今思ったらね。

(中略)

ダイ：毎日、朝、朝礼とかで、くだらんような感じで言っとったけど、あれが、社会人5年目とかになって、あれが結局、響いてくるんだね。あいさつとかね。

尾川：響いてんの？

ダイ：いや俺響いてますよ。マジで。

ヒロ：いやでもそれは分かるわ。

ダイ：ねえ。あいさつとか身だしなみとかさ。今だったら髭生えてくるじゃん。髭ひとつでもさ、相手の印象変わってくるけん。たとえばこんな、まあ今生えてないけど、もうちょいしたら生えてくるわ(笑)。で明日の朝になったらちょっと青くなってきてね(笑)。で無精髭じゃないけどさ、そんな生やしたやつがさ、来てみ？電気屋でさ。「電気工事してください」って来て、「おはようございます。今日をお願いします」って無精髭生やして来ます。したら「チッ、何かいつ？」みたいね。身だしなみからして、[ヒロ：〇〇電工それは絶対、究極的に許さんわ。] こんな感じで来たとしたらさ。

尾川：ははは(笑)。〇〇電工は髭とかダメ？絶対。

ヒロ：俺、絶対ダメですね。ぶっ殺されますね。マジで。

ダイ：でしょ？まず身だしなみでしょ。ま、俺もよく注意されましたけど。

(ヒロ・リュウ・ヒガシ・ダイ 2018/01)

生徒指導上の経験は、専門高校に限らず普通高校の卒業生においても想起されやすいだろう。しかし、工業高校の教師たちが職業の論理や規範を枠組みとしながら生徒指導を行っているという、工業高校フィールドワークにもとづく知見(尾川2012)と結びつけて解釈すると、本調査の卒業生らの語りの意味や意義が明瞭になる。筆者のフィールドワークでは、就職を主要な進路とみなす学校・学科では、生徒指導の場面で「職業上の必要から服装を注意し、職業に適合的な態度に『変われ』と指導していた」「『高校生らしい』服装や態度というより、『〇〇科の生徒として』ないし『△△の仕事に就く者として』のそれへの要求が指導の前面に出される」ことが観察されている(尾川2012, p.12)。卒業生らの語りは、そうした論理で組織化される工業高校の生徒指導に、職業生活に必要な規範や

価値、態度の面で職業的レリバンスを認めていることを示しているのである。

3) 工業高校における進路展望とジェンダー規範

本調査では、少数ではあるが工業高校を卒業した女性に調査協力を得ることができた。比較的高学歴層をイメージさせる「理系女子・リケジョ」とは異なり、近年は「ドボジョ(土木女子)」「電工女子」「けんせつ小町」といった言葉で、現場仕事に携わる(必ずしも高学歴ではない)女性イメージが多く産出されるようになってきている。建設業界や製造業界での女性活躍推進は官民一体となって取り組まれ、女性活躍推進法の施行に先立ち2014年に「もっと女性が活躍できる建設業行動計画」が策定されたり、電気に強い女性が男性を助けるマンガや、薦職の女性や重機を乗りこなす女性を集めた写真集も出版されたりしている(尾川2019)。

このような「工業系女子」ともいいうるイメージが流通するようになってきているが、実際、高校工業教育は女子にとってどのような経験なのだろうか。電気工事士になりたという女子生徒が増えている、またそうした女子生徒を企業が求めているなどの動向も見受けられるが(労働政策研究・研修機構2018)、彼女たちの職業的社会的化や進路選択の実態はほとんど明らかにされていない。

そのなかで、尾川・尾場(2023)は工業系女子の学校・学科選択の経験を明らかにしている。工業系の高等学校や専門学校に進学した女子生徒・女子学生たちは、バイクや工具が「好き」「かっこいい」等の明確な興味・関心を持ち、保護者や教師からの「後押し」を受けて進路を選択したと語っていた。知見として、彼女らの明確な意思の語りとは、しかしそう語らなければならない職種とジェンダーをめぐる文化的磁場の可能性が指摘された。それはつまり、「なんとなく工業高校」という語りは男子にありがちだとしても、女子の語りとしては周囲から理解・納得されづらいことを彼女たちが学習していた、といった可能性である。

このような職種とジェンダーをめぐる規範や言説は、工業高校の内部でも彼女たちの学校経験を特徴づけている。建築系学科を卒業したある女性は、工業高校での専門的な学習について「楽しかったです。『向いてないな』と思うことはなかった」「普通に楽しかったし、やりがいもあった」と振り返りつつも、高校3年時には専門性を活かした就職を考えなくなったという。下の語りに示されているように、学習内容が特定の職業内容と接続しているからこそ、その学習経験を通じて、自身と職業との断絶を意識するに至ったよう

である。

サキ：その、実習とかでやるじゃないですか。「わー、これ基本、男仕事だろうなあ」みたいな、[尾川：ああ、授業中に?] はい。

(中略)

サキ：あの、機材とか組み立てたり、運んだりするのは、[尾川：ああ。] 基本、先生が「お前は危ないから」と、「男にやらせとけ」みたいな感じだったんで。

尾川：あ、そういう何か、先生が、[サキ：はい。] 指導とか、何かアドバイスとかで、[サキ：ちょっと危ないから。]「これは男がやったほうが良い」とか。

サキ：「男子が持ったほうが良いんじゃないかな」、みたいな。

尾川：ふーん、なるほどね。まあそれ、聞いて何か思った?

サキ：えー、「そうなんだ」みたいな。ふふふ。

尾川：ふふふ。そんなにこう、疑問も、[サキ：はい。] 違和感もなく?

サキ：「あ、楽できるわ」みたいな。うふふふふ。

尾川：ふふふ。それをだんだん何か学習して行って、[サキ：はい。] 次の時も先生に言われる前から、「これは男が運べ」とかってサキさんが言ったりしなかった? (笑)

サキ：「これ、じゃあよろしく」って。うふふ。

(サキ2017/03)

また、別の工業高校の繊維系学科を卒業した女性によれば、高校で推奨される資格を取得しても就職場面で意味を持たないなど、実際には職業との関連性を見出せない学科カリキュラムもあるという。2000年代半ばに工業高校を卒業したナミは、自身が在籍した繊維系学科での経験を次のように語る。

ナミ：私、エステです。[尾川：エステ。へー。] その時あった求人の中で一番給料いいやつに就職しようと思って、上から給料順になってたんで、「ここ」って。「ここ受けます」。

(略)

尾川：工業高校だけど、特定の資格とか特定の業種とつながってない学科がある。

ナミ：ほぼつながってないです。

尾川：それはナミさんとかの生徒側からしたらつながってないけど、先生側からしたら、あるいは学校のカリキュラム的には、こういうことを学んで、こういう資格取って、[ナミ：っていうイメージ

はあったのかもしれないですけどね。] っていうのが、もしかしたらフォーマルにはあるんかもしれないけど。

ナミ：ただ、でも実際求人自体がないですから、その会社の。だし、関係性のあるってこじつけたら、洋服とかそういうアパレル関係なんかっていうぐらいしか、全然イメージがつかないですし。

尾川：でも、アパレルも販売になると、また全然違いますよね。

ナミ：そうです。大体ある求人は販売なので、「こじつけたな」みたいなものしか持ってこないですね。

尾川：言うたら、工業じゃなくても全然いい。

ナミ：そうですね。逆に繊維のことが分かったかって、「全然活かせんじゃないか」みたいな。なかなか。今思っても、「この学科で勉強したことを活かして就職しろ」って言われても、ちょっと「すごい絞られるな。あるんかな、そんな求人」って思いますね、今でも。ちゃんとそれを勉強しとったとしても。

(ナミ2018/04)

彼女の在籍していた学科には女子生徒が多く、男子生徒は数名に過ぎなかったという。このことから、工業高校のなかでも学習内容と職業との接続を見通しづらい学科・カリキュラムが「女子向け」であるかのような、いわば高校工業教育のなかの「女子トラック」が示唆されたといえるだろう。

職業教育のレリバンスに関する議論は、学習内容と職務の接続を前提としてきた。しかし、そうした接続性をカリキュラムや取得推奨資格などから制度的に強調できるのは、機械系、電気・電子系、建築系、化学系といった工業高校の主要学科であり、その他には接続性が強調されない(できない)学科カリキュラムも敷設されている。そのうえ、どの学科に在籍するかは多分にジェンダーの要素をともなっており、このことが工業高校卒の男子・女子のキャリア形成に影響を及ぼしていると推測してもよいだろう。従来、工業高校それ自体がジェンダーにかかわるトラックとする見方は共有されてきたといえる。本調査では、さらに工業高校内部にもそうしたトラックが存在し、中西(2013)のいう専門高校「小学科」とジェンダーの関係を検証する必要があることが示唆された。

4. まとめと考察：高校職業教育のパラドックス

以上の調査結果をまとめ、高校職業教育と卒業者の

初期キャリアの関連や、接続/断絶をめぐる考察を行う。

本研究の知見の1点目は、先行研究でも指摘されてきた、学習内容と職務のつながりの微妙さ(片山2016など)である。工業高校の授業で扱われる専門的な知識・技能は、それを学習する意義を生徒が在学中に理解することは難しく、業務によっては就職後ですら実感しうるか定かでない。ここで強調したいのは、高校職業教育のカリキュラムや指導内容が、将来の仕事と接続するかどうかという観点から吟味された場合、(在学中に実際の仕事内容を想像するのが難しいということもあって)生徒がその職業的レリバンスを理解・実感できないこと、さらには学習内容の意義に疑義を差し挟む余地が生まれることである。職業教育に比して普通教育カリキュラムは、むしろ将来の仕事への接続を想像させず、たとえば大学入試に焦点化することで学習内容の職業的レリバンスを不問に付すことが可能である。そうした普通教育カリキュラムを非常に広範囲に普及させてきた戦後日本の学校教育(小玉2003)は、いまや改革の対象とされている。学習内容と職業生活との関連性を強調することで児童生徒の学習動機を調達しようとする現行「キャリア教育」政策(中央教育審議会2011)や、「教育の職業的意義」回復論(本田2009)などは、その代表例である。しかしながら、教育と職業の関連性が強いはずの高校職業教育カリキュラムにおいてさえ、生徒たちは関連性を認識・実感しづらいという調査結果をふまれば、上記の教育改革はある種のパラドックス—「接続」への期待が「断絶」を意識させる—を抱えかねない、といえる。

2点目に、学習指導の場面よりも生徒指導の場面における教師の指導のほうが、初期キャリアにおける主観的レリバンスとしては語られやすいようであった。近年の職業教育をめぐる議論は、安定的なトランジションに寄与する職業的・専門的な知識・技能の獲得・活用の検証に躍起になり、植上(2011)が指摘するように、職業的な規範や価値観の学習成果には十分な関心を払ってこなかった。無論、規範や価値観に関する教育機能、あるいはその効果らしきものは、普通教育の結果としても生じうる。しかし、職業や仕事を媒体とする指導の内容や方法、あるいは職業教育の場の特徴的な教師-生徒関係(尾川2012)などの点に、職業教育における規範や価値観に関する学習の固有性があると考えられる。今後の高校職業教育カリキュラムの効果検証においては、習得された知識・技能に加え、職業規範や態度の形成も、キャリア形成を左右する重要な変数として設定する必要があるだろう。また、高校職業教育の今後のあり方を構想するうえでも、欠くこと

のできない論点になるだろう。

3点目に、工業高校で学んだ女性にとって、学校生活と職業生活の接続性は、「これ基本、男仕事だろうなあ」と学習されることで職種をめぐる従来のジェンダー規範を再生産する契機となっていた。工業高校内部の「女子トラック」は女子生徒の参入障壁を下げた可能性もあるが、推奨資格と就職が結びつかないことで、専門分野・職種でのキャリア形成の難しさを女子生徒自身が学ぶ場にもなっている。建設業や製造業で女性労働力に期待が集まる最近の動向において、高校工業教育がはらむこのようなパラドキシカルな問題を看過することはできないであろう(労働政策研究・研修機構2018, 尾川2019)。

工業教育カリキュラムを学び、建設・製造の分野で活躍する女性層が徐々に拡大しているのは確かである。しかし、女子生徒にとって工業高校で学ぶことの意味は、職業的な知識・技能の獲得や「工業系女子」としてのキャリア形成を促進する側面のみならず、それを妨げるかのような側面をも有している。ジェンダー規範の再生産はさまざまな場面で生じるが、職業教育の場におけるそれは直接に職種の希望形成、すなわち初期キャリアの選択に影響する可能性が高い。現在の政策動向との関連からも高校職業教育をめぐる論点として、理論的、実践的に取り組んでいく必要がある。

職業教育カリキュラムは、特定の職業に就くために必要な知識や技能を教授=学習することを目的とし、職務に役立つことを前提として体系化されている。それゆえ、片山(2016)が指摘するように、卒業後の職務に活かされるものとして「専門性」に実体的なレリバンスを想定する議論が主流である。しかし、本研究の記述と解釈は、高校工業教育には実体的なレリバンスがあるという自明な期待や想定が、むしろ学習内容と職務の断絶を意識させよう側面を強調する結果となった。また、職業的な知識・技能の教育よりもむしろ、生徒指導を通じた職業生活上の規範や態度の指導が、学校経験と初期キャリアをめぐる主観的レリバンスとして、卒業者には認識されやすいことを示唆した。

もちろん、専門的な授業や学習の成果として取得した資格が特定職種への参入可否を決定づけるという点では、実際には専門的な知識・技能の学習は職務と接続しているといえる。しかし、学習経験が有用か否かという学習者や卒業者の視点や経験からは、高校職業教育がパラドキシカルな性格を有する営みであることが理解できる。教育と職業との接続を強調すればするほど、その断絶が意識されていってしまう。R. K. マートン(訳書1961)による社会学的洞察を借りれば、職

業教育の逆機能ともいえる事象が工業高校に潜んでいるかのようである。あるいは、能力主義には常に問いなおされ、批判される性質がはじめて組み込まれているという「メリトクラシーの再帰性」(中村2018)にならって「職業的レリバンスの再帰性」を指摘できるかもしれない。

いずれにせよ、こうしたパラドックスのなかで教師は職業教育カリキュラムを教え、生徒はそれを学ぶ。このように高校職業教育をとらえなおした場合に必要なカリキュラム研究や教育実践の探究方針について、今後検討していく必要がある。加えて、本調査では学習指導だけでなく、あるいはそれ以上に、生徒指導の意義や効果が強調された。今後、教育の職業的意義を再構築していく理論的、実践的な試みにおいては、職業教育における生徒指導の意義と機能を位置づけていく必要があることを再度強調しておきたい。

本調査では限定的なケースから足がかり的に論点を提示したにとどまるが、さらに議論を洗練させるため、質的調査の拡充に加えて量的調査など多様なアプローチでの調査の蓄積が必要である。今後の課題としたい。

【引用参考文献】

- 中央教育審議会, 2011, 「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)」。
- 濱口桂一郎, 2013, 『若者と労働—「入社」の仕組みから解きほぐす—』中公新書ラクレ。
- 長谷川雅康・佐藤史人, 2002, 「高校工業教育に対する工業に従事している卒業生による評価: 大阪市立都島工業高等学校の事例」『職業と技術の教育学』15, pp.67-81。
- 長谷川雅康・佐藤史人・三田純義, 2005, 「工業に従事する卒業生は工業教育の内容をどう評価しているか」齊藤武雄・田中喜美・依田有弘編著『工業高校の挑戦—高校教育再生への道—』学文社, pp.201-210。
- 本田由紀, 2009, 『教育の職業的意義—若者, 学校, 社会をつなぐ—』筑摩書房。
- 石岡学, 2011, 『「教育」としての職業指導の成立—戦前日本の学校と移行問題—』勁草書房。
- 金井郁, 2011, 「中小製造業における女性労働者」労働政策研究・研修機構『中小製造業(機械・金属関連産業)における人材育成・能力開発』労働政策研究報告書 No.131, pp.268-290。
- 片山悠樹, 2014, 「工業教育における『ものづくり』の受容過程」『教育社会学研究』第95集, pp.25-46。
- 片山悠樹, 2016, 『「ものづくり」と職業教育—工業高校と仕事のつながり方—』岩波新書。
- 荻谷剛彦, 1991, 『学校・職業・選抜の社会学』東京大学出版会。
- 小玉重夫, 2003, 『シティズンシップの教育思想』白澤社。
- 小杉礼子, 2011, 「中小製造業労働者の職業能力開発における学校教育の役割」労働政策研究・研修機構『中小製造業(機械・金属関連産業)における人材育成・能力開発』労働政策研究報告書 No.131, pp.201-241。
- マートン, R.K., 森東吾ほか訳, 1961, 『社会学理論と社会構造』みすず書房。
- 中村高康, 2018, 『暴走する能力主義—教育と現代社会の病理—』筑摩書房。
- 中西啓喜, 2013, 「日本型トラッキングシステムの変容—トラッキング構造の二極化による学歴格差再生産機能—」博士論文(青山学院大学)。
- 尾川満宏, 2012, 「トランジションをめぐる『現場の教授学』—ある地方工業高校における学校と職業の接続様式—」『子ども社会研究』18号, pp.3-17。
- 尾川満宏, 2019, 「工業系女子とはだれか?—政策・業界動向と工業教育・職業選択をめぐる女性の経験—」『愛媛大学教育学部紀要』66, pp. 1-8。
- 尾川満宏・尾場友和, 2023, 「工業系女子のキャリア形成—学校学科選択の経験に着目して—」『教育学研究紀要(CD-ROM版)』68, pp.354-359。
- 植上一希, 2011, 『専門学校の教育とキャリア形成—進学・学び・卒業後—』大月書店。
- 労働政策研究・研修機構, 2010, 『学校時代のキャリア教育と若者の職業生活』労働政策研究報告書 No.125。
- 労働政策研究・研修機構, 2018, 『日本型高卒就職システムの現在—1997年・2007年・2017年の事例調査から—』労働政策研究報告書 No.201。
- Rosenbaum, James E. and Takehiko Kariya, 1989, "From High School to Work: Market and Institutional Mechanisms in Japan", *The American Journal of Sociology*, 94(6), pp. 1334-1365.

【謝辞】

本研究はJSPS科研費(16K17423, 19K02563)の助成を受けた。